奈文研ニュース
2004.Dec No.15
NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp

アフガニスタンからの研修生の受け入れ

文化財研究所では、西アジア諸国文化遺産保存協力事業の一環として、本年度アフガニスタンから考古学２名、保存科学１名、建築学１名の計４名の専門家とイラクから保存科学の専門家２名を招聘して研修をおこなっています。いずれの国においても博物館収蔵品の修復保全が急務ですし、アフガニスタンにおいては、歴史的建造物や遺跡の調査が必要でありながら手付かずになっているのが現状で、専門的知識と技術を持った人材の育成が求められています。

アフガニスタンからの研修生は、考古学の２名が９月27日に来日、あと２名は10月29日に来日、12月22日までの滞在です。イラクからの研修生は10月22日に来日し12月18日までの滞在です。考古学の２名は滞在の大半を奈良文化財研究所での研修に当てています。以下、このふたりに対する研修を詳しく見てみます。

研修では基礎を重視し原理を理解してもらえるように努めました。机上の理論よりも実際の体験が大切なので、平城宮跡発掘調査部の現場で実地の訓練をおこないました。ちょうど第一次大極殿地区での調査の過程をほぼ全体にわたって経験することができました。すなわち、機械掘削、地区割り、写真撮影や壁面剥ぎ取りを見学するだけでなく、排水溝の掘り下げ、遺構検出、遺構面清掃、壁面清掃、土層断面図作成、トータルステーションによる測量、レベル移動、平板実測を実習しました。

遺跡の土の性質は日本とアフガニスタンでは大きく異なります。しかし、遺構を検出する手順やそれらの記録の仕方は風土を超えて応用可能です。慣れない機器の操作に手間取る場面はあったものの、熱心に毎日練習を繰り返すことによって上達していきました。

座学でも、理論の学習とともに実習をおこないました。まず、発掘調査の原理を学び、実際の発掘にいたるまでに必要な調査研究の内容とどのように発掘を進めていくべきなのか、順を追った講義をおこないました。もちろん研修生にとっては初めて聞く話ではありませんが、現場作業とともに学ぶことでより深く理解してもらえたと思います。

遺物の実測では、作図の原理とともに土器と石器の実測を練習しました。合わせて、打製石器製作原理も学び、実測図を報告書に載せる時の図版の作成の仕方、適切なレイアウトなどについても多くの実例をもとに講師と意見交換をしながら体得しました。瓦の拓本をとる実習もおこないました。

日本の歴史、日本考古学についての概説はもちろん、環境考古学では土壌や骨の分析を、年代測定では年輪年代学についても学んでいます。

今回の研修では、時間の制約もあり外部見学はあまり多くはおこなっていません。それでも低湿地遺跡の発掘現場で、土崩れを防ぐ対策に興味を示し、いくつかの遺跡での調査後の整備、復原建物や博物館展示での工夫に感心していました。

密度の濃い実習を熱心にこなした彼らが、アフガニスタンで成果を活かしてくれることを希望する一方、私たちの側も習慣の違いなど多くのことを学んだと思います。また多岐にわたる専門的な話を通訳してくださった方々に感謝いたします。

（埋蔵文化財センター　森本　晋）

平城宮跡の発掘現場にて

発掘調査の概要

高松塚古墳（飛鳥藤原第137次）

平成16年10月から、特別史跡高松塚の発掘調査を実施しています。この調査は、「国宝高松塚古墳壁画」の恒久保存対策の一環として、墳丘の現況が壁画の保存にどう影響を及ぼしているのか、また古墳築造当初の墳丘の規模や形態、構造の解明を目的としたものです。調査は、文化庁の委託を受けた奈良文化財研究所が、奈良県教育委員会（橿原考古学研究所）、明日香村教育委員会と共同で、平成17年3月までの予定で実施します。

高松塚古墳壁画は昭和47年に発見され、飛鳥ブームや考古学ブームをひきおこしました。この貴重な壁画を発見時の姿で保存するために、昭和51年に保存施設が完成しました。それから30年近くが経過した現在、壁画の経年変化による劣化が社会問題化しています。最新の科学技術や学術成果を駆使した壁画の保存対策の策定が急務ですが、そのためには墳丘の現況把握と、再整備に向けた学術データの収集が欠かせません。

高松塚はこれまで径18m、高さ約5mの円墳と推定されてきましたが、その規模や形状は必ずしも確定したものではなく、近くにある中尾山古墳のように、八角形墳になる可能性もあります。

発掘調査は、壁画の保存に悪影響を与えぬよう、慎重な配慮のもとにおこなわれています。降雨時の雨水の浸透を防ぎ、直射日光による乾燥や温度上昇を抑制するために、墳丘部をすっぽり覆う巨大な仮設覆屋を建設しました。覆屋内部の調査は、雨天でも調査が可能なため、調査員はやや疲労気味ですが、連日訪れる多数の観光客に見守られながら、調査は順調に進んでいます。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　松村　恵司）

墳丘部の発掘調査風景

豊浦寺の調査（飛鳥藤原第133－9次）

592年に推古天皇が即位した豊浦宮（とゆらのみや）は、飛鳥時代の始まりを告げる宮殿として有名です。彼女は603年に小墾田宮（おはりだのみや）へ移り、その後、豊浦宮の跡地を寺にしたと伝えるのが豊浦寺（とゆらでら）です。僧寺である飛鳥寺に対し、尼寺として知られていますが、飛鳥寺と同じく、造営者は蘇我氏でしょう。現在の向原寺（こうげんじ）の境内が古代の豊浦寺の講堂にあたり、今回、納骨堂建設に伴って、13㎡を発掘しました。

厚い盛土のため、ごく狭い幅しか深く掘り下げられませんでしたが、予想どおり講堂基壇の硬い版築層を検出し、さらにその下には、地表下1.7mの深さで砂利敷が広がることを確認しました。

過去、向原寺の境内では、1985年に講堂の南端を調査しており、基壇の下からは豊浦宮の一部とみられる掘立柱建物も見つかっています。これらの成果をあわせると、講堂基壇の南北規模は23m前後になりそうです。砂利敷は、豊浦宮の建物の周囲に施された舗装と思われます。一帯に、豊浦寺と下層の豊浦宮の遺構が良好な状態で残っていることを確認した意義は大きいといえるでしょう。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　小澤　毅）

藤原宮朝堂院東第六堂（飛鳥藤原第136次）

藤原宮朝堂院地区の第8回目の発掘調査です。南北約12m・東西約50mに及ぶ東第六堂の全容解明を目標に、まずは東半分の発掘区を設けました。とても遺構の残りがよく、成果が期待できそうです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　市　大樹）

藤原宮朝堂院東第六堂の発掘現場（西から）

平城宮中央区朝堂院の調査（平城第 376 次）

今回の調査は、中央区朝堂院の朝庭部分での２回目の本格的調査となります。昨冬おこなった平城第 367 次に引き続き、平城第 376 次として、2004 年 10 月５日から調査を開始し、12 月 24 日に終了しました。調査面積は約 1,700 ㎡です。

中央区朝堂院は平城宮の中央部に位置し、本調査区は朝庭と呼ばれる広場の中央部東側にあたります。

先の調査ではこの朝庭部分に広がる掘立柱建物群が見つかり、これらが東区の朝堂院朝庭で確認した大嘗宮（だいじょうきゅう）遺構の一郭とよく似た建物対配置でした。

これにより中央区朝堂院の朝庭においても、天皇が大嘗祭を営んでいたことがはじめて明らかになり、この南側に大嘗宮遺構がさらに広がると予測できました。

このため、今回はこの南側に調査区を設け、大嘗宮東半部の全面的解明を目指すこととしました。

調査では、まず朝庭に広がる小石敷を確認しました。小石の大きさには大小様々あり、小石敷が希薄な場所や後世の耕作により削平された場所などがあったものの、小石敷が極めて良く残されており、朝庭一面に小石敷が広がっていた状況が想像できます。

この小石敷を部分的に残しつつ、その下層において複数の掘立柱建物の遺構を確認しました。先の調査で確認した建物群に加え、新たに２棟の掘立柱建物とこれらを取り囲む柱列を検出したのです。

大嘗宮は東側の悠紀院（ゆきいん）と西側の主基院（すきいん）からなることが知られており、『儀式』（872 ～ 877 年頃成立）の記載から復原できる大嘗宮の建物配置を参考にすると、今回見つかった建物群は、悠紀院の建物群にあてることができます。

これによると、建物を囲む柱列は、悠紀院の北限、東限、南限で、悠紀院の規模は東西 31.2m（105 尺）、南北 43.8m（148 尺）となります。北半部に配した２棟の建物は、臼屋（うすや）、膳屋（かしわや）に、やや広い南半部に配した２棟の建物は正殿、御厠（みかわや）に推定できます。

これらの建物や柱列の配置の特徴には、側柱列を揃える点があげられ、極めて高い計画性を持った配置を持つことがわかります。

さらに大嘗宮の建物遺構の柱穴からは奈良時代の瓦や磚が出土しました。

最も新しい瓦は 757 ～ 767 年（天平宝字～天平神護年間）頃のものであることから、これらの建物は奈良時代後半、第一次大極殿院解体以降のものとすることができます。

したがって文献史料の検討とあわせると、今回見つかった大嘗宮遺構は、奈良時代後半で大嘗祭をおこなった場所を『続日本紀』に明記しない 765 年（天平神護元年）の称徳天皇の大嘗祭の時のものであることが確実です。

このように、称徳天皇の大嘗宮の全貌が明らかとなった結果、その規模と構造は東区朝堂院の朝庭で見つかっている大嘗宮群とほぼ同一であることがわかりました。

史料から称徳天皇の大嘗祭は僧尼が加わった異例の形式で行われたことが知られていますが、その舞台は決して異例ではなかったようです。

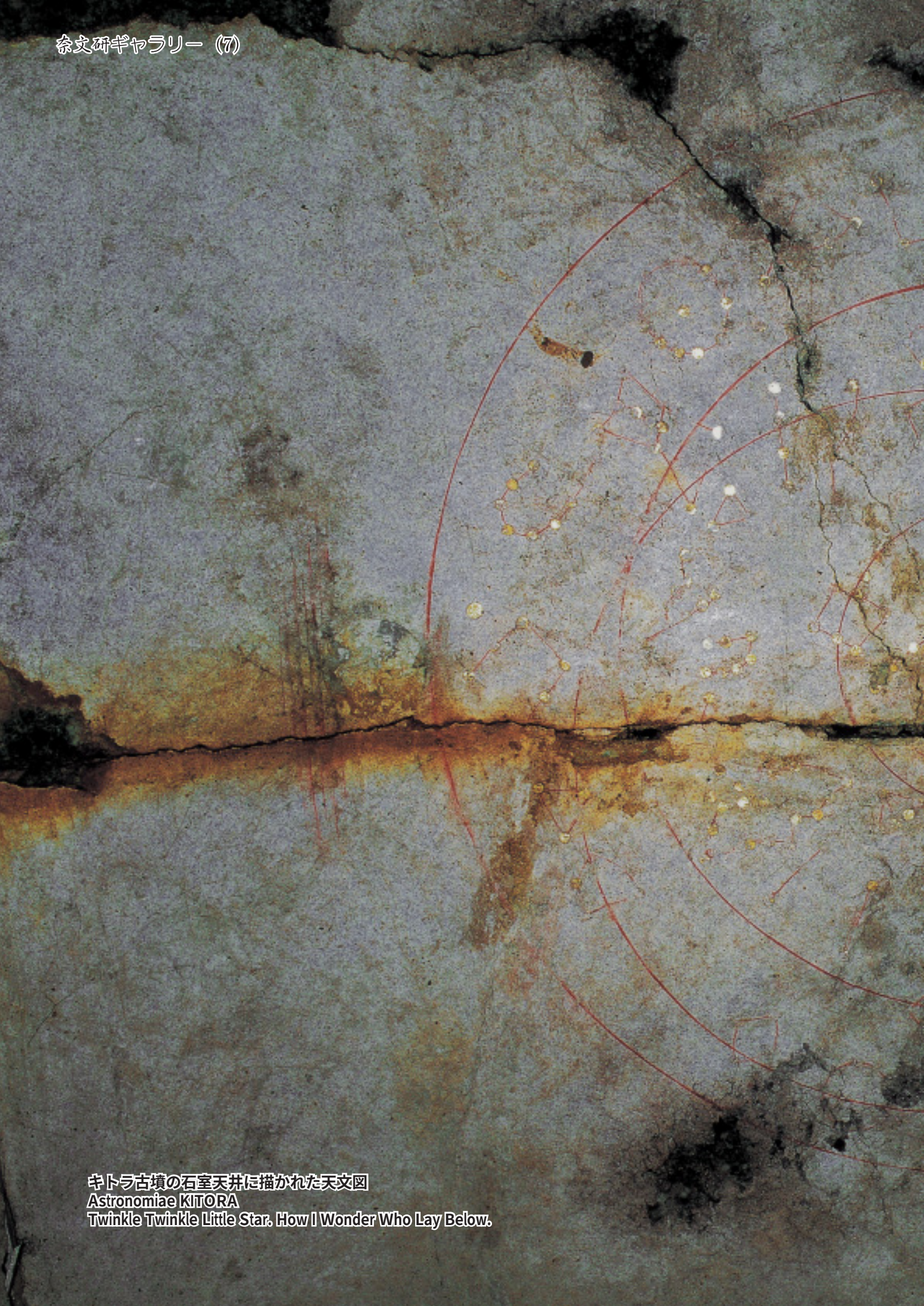
一方、大嘗宮に直接関連しない掘立柱建物群やこれを囲む柱列も検出しました。

柱穴の重複関係から、大嘗宮よりも後の時期の建物であることがわかり、これらの性格や規模は現段階では不明ですが、中央区朝堂院中軸上に位置する特殊な建物群であり、今後その性格を慎重に究めていく必要があります。

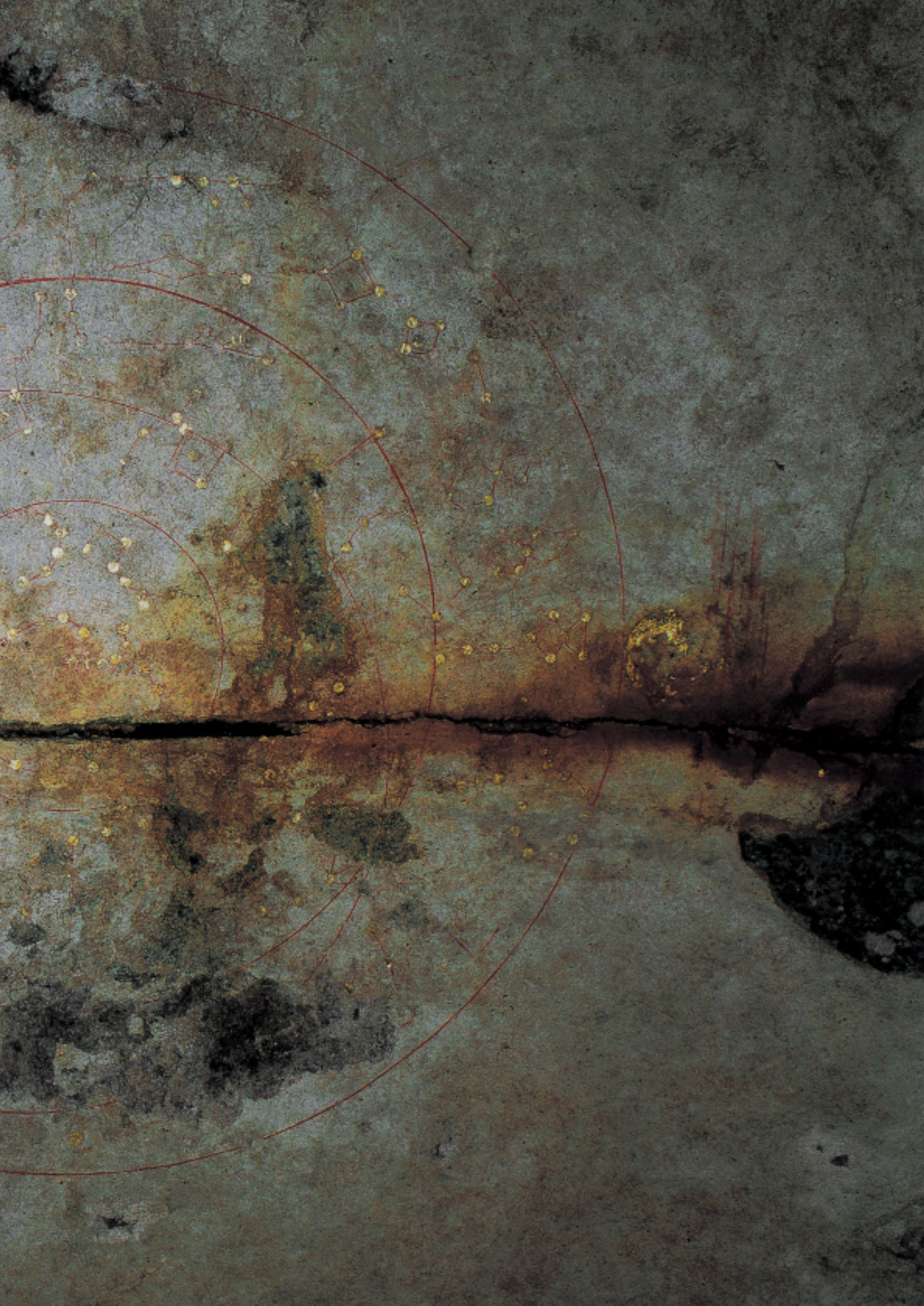
本調査では古代の大嘗宮の様相を明らかにするとともに、平城宮の中枢部分の利用の実態について新たな課題をもたらした調査として意義づけることができます。

（平城宮跡発掘調査部　清永　洋平）

平城宮中央区朝堂院調査区（北から）



キトラ古墳の石室天井に描かれた天文図
Astronomiae KITORA
Twinkle Twinkle Little Star. How I Wonder Who Lay Below.



興福寺の典籍文書調査

文化遺産研究部歴史研究室

当研究所では、興福寺所蔵の典籍・古文書の調査を継続しておこなっています。膨大な史料群について、１点ずつ調書を取り、ラベルを貼り、写真撮影を続けていくという、気の長い作業になります。しかし、未知の史料を探索する楽しい仕事です。

その成果の一部として、2004年３月には『興福寺典籍文書目録』三を公刊しました。第61函から第70函までを収録しています。時代はほとんどが、鎌倉時代から江戸時代にかけてです。平安時代の末に、興福寺は平家の南都焼討ちによって灰燼に帰しますから、それ以前の史料は極めて少ないのです。しかし今回収録分にも、平安時代のものが数点存在しました。それらは歴史の空白を埋める貴重な史料です。

時代も内容も多様ですが、多数を占めるのは、維摩(ゆいまえ)会などの法会(ほうえ)に関わるものです。写真にあげたのは江戸時代の帳簿ですが、やはり法会関係のものです。ご覧のように形が少し変わっていて、膨大な量の紙を束ねています。しかしこれでも一冊の本なのです。持ち上げるのも開くのも一苦労です。

興福寺は維摩会を挙行する藤原氏の氏寺として発展し、平安時代の院政期には大和国を支配するまでになります。それ以降、奈良の歴史は興福寺を中心に展開していきます。その興福寺の史料の全貌が、当研究所の調査により、次第に明らかになってきているのです。　　（文化遺産研究部　吉川　聡）

十七日分講問着到（興福寺所蔵）　第65函第１号

研究室紹介

埋蔵文化財センター保存修復工学研究室

研究室の前身は埋蔵文化財センター発足後３年半たった昭和52年設置された「保存工学研究室」です。そこでは平城調査部の計測修景調査室などと連携して、遺跡の保存整備（保存修景）に関する研究をおこない、全国の地方公共団体が実施する遺跡整備事業の推進への協力支援をおこなっていました。

埋蔵文化財センターには保存修復科学研究室と保存修復工学研究室という、一字違いの研究室ができましたが、この研究室は遺跡整備に関して、土木工学など工学的側面からの研究を担当するとともに、研修をはじめとして前研究室の業務を継承しています。

遺跡はさまざまな土木工事に際して、あるいは地道な研究の結果として発見され、時には大々的に報じられ、そのうち歴史的学術的に特に重要なものについて史跡に指定されます。先人の足跡が刻まれた文化遺産である遺跡を永く後世に伝えるには、周辺住民をはじめ多くの国民に、その歴史的学術的意義が深く認識され、かつ、さまざまな社会教育の場として活用されることが必要です。

遺跡整備とは、遺跡とその周辺について、現状で可能な限りの手当てをして後世に伝えるための保存処置をおこなうとともに、時には復原的に示すなどして、遺跡の歴史的・学術的意義を明らかにしながら保存・顕彰し、維持管理・活用するためにおこなわれます。それには考古学・歴史学・造園学・建築学・土木工学・自然環境学・都市工学・観光学など多方面からの検討とその総合が必要であり、住民生活を含む周辺環境との共生も大きな課題です。

整備は官衙、集落、寺院、庭園、古墳、生産遺跡など遺跡の種類や置かれた環境によっても手法が異なります。研究室ではこれまでに他研究室と共同で「復原建物」や「官衙遺跡」などの遺跡保存整備の実態調査をおこない、工法を中心とした研究を進めてきました。そのなかで、「何処も同じ」にみえる事態が生じつつあることも事実です。今こそ遺跡の個性と条件に合わせた整備が求められています。「よりよい整備」「ふさわしい手法工法」とは何か？遺跡保存と整備活用の包括的体系的な研究が必要になっています。　　（埋蔵文化財センター　西口　壽生）

飛鳥資料館のみどころ（7）

ー継続した広報発信コーナー
携帯電話用サイトの紹介ー

皆さんは携帯電話でホームページを見たことがありますか？

飛鳥資料館では2003年4月より、携帯用サイトでも情報を提供しています。館内展示はもちろん明日香遺跡巡りにも役立てるような解説を充実させ、特別展の頃には展示内容や講演会のお知らせも掲載します。

定期的に更新しているのは明日香村でのイベントやお祭りなどの情報、資料館の近況などです。特に更新することがない場合もありますが、そんな時は明日香へ通勤する途中に気づいた小さなことを書き込んでいます。

また、館内では「Xナビ」という機器でドコモとau向けに接続サービスもおこなっています。「Xナビ」は携帯に差し込むだけで資料館のサイトへ直接接続することが出来る優れものですが、残念ながら利用される方は少ないようです。

まだまだ認知度の低いサイトですが、より多くの方に資料館を知ってもらえるよう地道に更新を続けていきます。

（飛鳥資料館　江川　あらた）

＜携帯電話用サイトURL＞
NTT ドコモ用　http://asuka.nabunken.jp/i/
ボーダフォン用　http://asuka.nabunken.jp/j/
au用　http://asuka.nabunken.jp/ez/

「トップページ」

「Xナビ」

■　記　録

埋蔵文化財センター研修
○古代集落遺跡調査課程専門研修
11月30日～12月10日　22名
○報告書作成課程専門研修
１月12日～１月21日　21名
○遺跡保存整備課程専門研修
１月26日～２月９日　16名

発掘調査現地説明会
○平城第376次（中央区朝堂院）発掘調査
12月11日（土）　752名

発掘速報展
○奈良の都を掘る－平城2004－
11月２日（火）～30日（火）

飛鳥資料館　秋期特別展
○「古代の梵鐘」
10月８日（金）～11月28日（日）

学会・研究会
○日本遺跡学会
11月27日（土）～28日（日）
○木簡学会総会・研究集会
12月４日（土）～５日（日）
○古代庭園研究会
12月14日（火）～15日（水）
○保存科学研究集会
12月16日（木）
○古代官衙・集落研究会
12月17日（金）～18日（土）

■　お知らせ

発掘調査現地説明会
○飛鳥藤原第137次（高松塚古墳）発掘調査
２月27日（日）

特別展
○日本の考古－曙光の時代－ドイツ帰還展
３月23日（水）～５月８日（日）
奈良国立博物館

飛鳥資料館　春期特別展
○仮題「飛鳥の終末期古墳
－キトラ・カラト・マルコ・高松塚－」
４月16日（土）～５月29日（日）
主催　飛鳥資料館・明日香村

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.jp
Eメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2004年12月